



德倉具傳志

後編

拾七

八遠13  
2475  
37



門八遠3  
2475  
卷 37

傳記 海客見少志或編上之殆也

目錄

一 梅色入道 志將平氏 瑞多良

并 允全 吉清 元朝 少良





Faint handwritten text in the upper right section of the right page.

田原

長門 藩内見多志武編を三拾七

出 藩内見多志武編を三拾七



福も乃道 藩内見多志武編を三拾七

系 藩内見多志武編を三拾七

右方 藩内見多志武編を三拾七

系 藩内見多志武編を三拾七

紙子 藩内見多志武編を三拾七

右 藩内見多志武編を三拾七

あはれ、作らばは海つ尉正徳中糸太  
湯つ尉新水身、正徳元其年、改子  
長ふて元久元年とありとてまきま  
歌作軍相成る修成中まはは成座之  
とつとも押迫は方めつまむひめて  
此句とらる一久らま高の兼此と  
あはれ、のーしとてまきまの歌作とてありま  
とあり、君親の山某のこころとてまきま

陸多、美草の法々て、叶ぬとてま  
あひ波、ぐるま、海のまゝありてあはれ  
は極、しとてまきま、初め、誓ひ、まきま  
とてまきま、あはれ、まきま、あはれ、まきま  
叶ぬ、とらると、けらる、あはれ、誓ひ、歌  
まきま、あはれ、まきま、あはれ、まきま、あはれ、まきま  
あはれ、海原の、清い、まきま、あはれ、まきま  
あはれ、あはれ、まきま、あはれ、まきま、あはれ、まきま



ふらしを伝へしふんまにまろしとやきき  
ししてま病の致しんとしとすま一櫛  
色か魚とゆらりま櫛毛い元未好の家  
は凶臣怪巻しと成とつうひ兼記  
まろしらしとろりとららけ所長漢字  
しらししとろりまありと服しと此糸の  
あつ子あつしと救のくこの救屋を思ひ  
怪巻するのぢふあまをとおし一武人

内海波任命より夏元清にありとの  
てまあつふも能くまあつて好汗  
清あつんとするとのあつてま主成教  
のくこの傳をえそとあつて漢字子筆  
北條の在州の家まのくろしとら救の  
くいあつてを治癒すとのあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
まあつてあつてあつてあつてあつてあつて

必すまうしく汁をひくこと有りしに  
 日船中の新ぬちを概ぐ云備の  
 の号魚に入込みて其の  
 注みざる物して海神の五を  
 是別よりすると其後軍の  
 物ありて誰多伝るものあり  
 リしをそそむがの事とし  
 ことしむるなり

鎌倉の鳥よりうづのふまぬり  
 問とそと高村屋番にりよか  
 故よりそよまゝの  
 倭軍家の依概のゆきし  
 新なるに君いすまひし  
 りものしゆ後しとくも  
 か(四)家人のゆははりし  
 とらよ志氣仰のりる  
 君と義志し





帰る事一み 此處の心も一とてし  
その多のい 業を心石素の心る意の  
よく今入道を行きども 四巻いんて  
まゆさへ 百財のゆらさるるまのび  
ぞゆいとも 施まづ子 智計のく 直意  
借の心ゆく 慧光とくふの 信信丹  
ての心ゆく 一く なる一りさる一り  
勢一もゆをちたての 勢とあへん

ありやうよ 柳三行集うはりとの 杖筆を  
伊ひくも 好ゆいとも 権太の 筆を  
懐りし 伊ひはらば 妙とい 世修を  
とらうく まるとも 一とて 筆を  
世修とも 一とて 筆を  
公よまらうも 世の 心る 杖筆を  
ゆい 美との 心る 杖筆を  
とらうく 筆を 一とて 杖筆を







以しゆゆき入るゝに遊ぶるもあは  
損なふものも後あるもぢふはと  
さういふ世の強さよこあふざらやう  
只の浮世とていふ一翫のうらやまを  
ごうそねれいよとらむをけり  
一に於て居るとして先をまた  
入道とてわははつ府とて  
名に於て神とてとてとも  
名に於て神とてとてとも

あふわけて浮世にけり  
みもた金吾のいふ  
淡々と情事とていふ  
其の事とて一刺入  
其情のあつらひ  
のうた世のうらやま  
あつらひの事とて  
情事とていふ









とら申はる然らるるぞありぬ  
さしらするやあさゆも  
ゆよひとさしづきま  
りせしに将軍討政子し  
ゆよ、海くもが新首  
取とのゆとさしづき  
と討政と平忠の  
修治はな附ま山平  
人、我く

作まらるるありしと所  
かまはれぬ海と  
なりてまらるるの  
とゆえありあり  
のふらとせし又  
海人々物色  
抄ありあり  
らんきしは

みはくふも侍りてとて老臣番くちあ  
子能下海つるあまつるむもさる  
ありと稀毛も夜氣味もらくいなり  
一かやら夏夜海だまよと一くらす改  
稀毛とよんぞ他言古の浪原の津板  
みしはくこのあつるさつる人のきり  
体言上らりし余津ゆりりこそ一  
去ゆきの折糸りしや侍者の地を

きりり一とそはたけらまよぬ人  
はとあまひ一か折糸りつる一  
とらひのりりもまよひるまよひの  
侍者向体見たるさるあまひの  
ゆらまよて氣うはらんとたせ一か折  
たに夜浪のまよりけを相ひまよ解の  
ゆらまよりまよて侍者をめまよも返る  
ゆらまよもまよとらるまよ中まよ電侍

ついでに先づに別へ此名をさしけらるる  
どよとくまのつとみゆくさうの標一はた  
とくまの標は縁後あがかりと標云  
ゆりゆりくつらわはま登がしりく  
面体見えさうをゆくとあがり一はよ  
あがりゆりくさうゆりままゆりゆり  
せーか邪智をとらる一は然らるる  
かせども善信りりよし余と善信

ついでに先づに別へ此名をさしけらるる  
どよとくまのつとみゆくさうの標一はた  
とくまの標は縁後あがかりと標云  
ゆりゆりくつらわはま登がしりく  
面体見えさうをゆくとあがり一はよ  
あがりゆりくさうゆりままゆりゆり  
せーか邪智をとらる一は然らるる  
かせども善信りりよし余と善信

しつとていふこととていふこと  
かういふやい偽り観のくまんとて  
吾中の頼しとていふやい  
まの—とていふとていふ  
衆のほろけとていふ  
此の世の世とていふ  
平生の情のまじりていふ

しつとていふこととていふこと  
かういふやい偽り観のくまんとて  
吾中の頼しとていふやい  
まの—とていふとていふ  
衆のほろけとていふ  
此の世の世とていふ  
平生の情のまじりていふ

く得るに―ののたけなるに  
よとくをまき松毛を返すに  
しとせぬに其のまのまの  
ま書をいへいせ―の  
くはとあつた廿日海軍  
はみまを返して―  
かかをい傳ぬまお返を―  
くせられたの―  
き―

とまに松毛を返すこと  
や欠身復のりこと  
おいひらぬ―  
よのまま―  
て松毛を返つて―  
よき―  
よまのまを―  
よのまを―



あまのりつと白雲とてさう人ととくを  
りくし一々さびのちあはれかてき  
御守屋へはるし一憐れの命と  
して金吾の川深をさうり  
紅明やらりしとらありしを  
とらとらとてさうり  
まを化丹の歌ありとありと  
はまを海日のあひあひと

此よりんとてさうり  
あまのりつと白雲とてさうり  
御守屋へはるし一憐れの命と  
して金吾の川深をさうり  
紅明やらりしとらありしを  
とらとらとてさうり  
まを化丹の歌ありとありと  
はまを海日のあひあひと





サツノ段のみらけいふくしんをいふ  
あけりしとを新編さしむるまじしをわき  
我と激なりんといふらや美湖又我  
まけりし親父の祓とももるが我を祓  
杖をいふ方の押出ちくらさきか  
みふし不意の北條が祓らふなりと  
北條の祓とて後祓とももるの祓  
祓の美湖のやどらこしといふか

ぞ我が後とらふらうとて天をうら  
くして北條一筋とてをさらまの祓  
さしとを我がのいふとていふ  
うらとて金座のまけは祓らふなり  
りしとてをいふとていふ  
祓のいふとてをいふとていふ  
らとてさのし祓のいふとていふ  
とていふとてをいふとていふ

秘今切抜してあんなに金とて  
うご—きりなぐらあつて尸やうを  
此後け政がけらふは政の御—御  
軍よりほくく下とて終るよん生言有  
りてけいふえんえ年六月十八日  
あつて少くして政の—のうらむ  
あ—うらむあつて金産がらから  
とて今君祿を所蔵すよあつて

白紙の—はるもいふとら  
いせぐらあつてあつて—あつて

秘今切抜してあんなに金とて

